

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

アッシージの聖人フランチェスコとイタリア

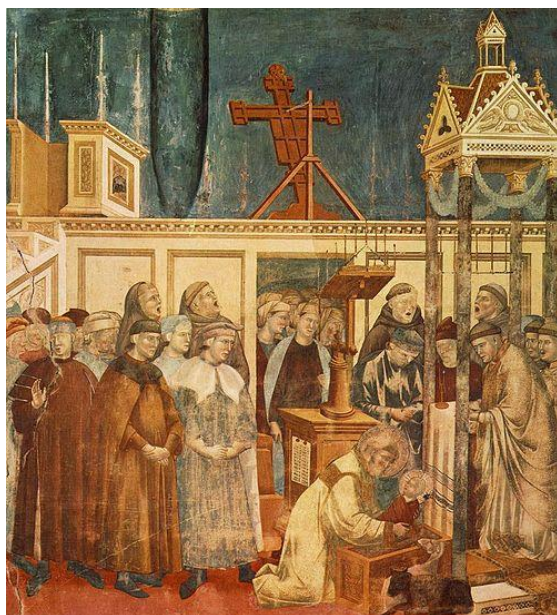
深草 真由子

今年もクリスマスのシーズンがやってきた。うっとうしい天気が続いても、通りを行く人たちの表情は明るく、あちこちから Buon Natale と挨拶する声が聞こえてくる。広場ではクリスマスマーケットが開かれ、ツリーやその飾り、そして手の込んだものが多く、ヴァリエーションの豊かなプレゼーペなどが並べられる。

プレゼーペというのは聖書で描かれているキリスト誕生のシーンを再現した模型である。ベツレヘムの荒野や石造りの家々などを背景に、マリアとその夫ヨセフ、羊飼いと羊の群れ、牛、ロバ、天使の人形がまだ空っぽの飼い葉桶を囲んでいる。クリスマス当日になるとその飼い葉桶の中に赤ん坊のイエスが現れ、その幼な子を拝むために東方の三博士が星に導かれて一歩、一歩、聖家族のもとへと近づいてくる。こういったものがこの時期になるとイタリアのどの家庭にも飾られて、ツリーのそばに並べられるプレゼントといっしょに、クリスマス気分を盛りあげてくれる。

プレゼーペを考案したのはアッシージの聖人フランチェスコだと言われている。グレッッチョというイタリア中部の小さな村で、1223年12月に起きたことである。その頃フランチェスコは、みずからが創設した修道会が大きくなるにつれ、もともと目指していた姿からかけ離れてしまったことに心を痛めていた。それに加えて目の病気に罹っており、体調も思わしくなかった。そんな精神的、身体的な苦しみを和らげることのできる、ささやかな喜び

として、クリスマスのミサでキリスト誕生の場面を再現しようと思いついたのだった。村人たちの協力を得て行われたそれは presepe vivente (生きたプレゼーペ) といって、人形ではなく、人と動物が登場する劇のようなものだった。この presepe vivente は今でも各地で行われるそうである。



【ジョット作『グレッッチョのプレゼーペ』】

出典元: <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=93851>

聖フランチェスコが生きた 12 世紀後半から 13 世紀前半にかけては、期待と不安の入り混じる、大きな変化の時代である。聖地エルサレムにはイ

スラムの英雄サラディンが君臨し、さらにはるか彼方ではモンゴル人の帝国が生まれつつあった。

フェデリーコ 2 世がシチリアを統治するのもこの頃である。彼のパレルモの宮廷では「世界の驚異」と言われるほど豊かな文化が花咲いた。ヨーロッパの都市に大学が創立され、商工業が発達してブルジョワジーという新たな階級が生まれた。

教皇の権力はインノケンティウス 3 世の下で絶頂を極めた。パリのノートルダム大聖堂のような、天に向かって伸びる壮大なゴシック様式の教会が建てられたのもこの時代である。一方でイスラムに対抗して十字軍が派遣され、ヴァルド派やカタリ派のようなキリスト教の異端は弾圧された。



【チマブーエによるフランチェスコの肖像】

出典元: <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=444467>

アッシージのフランチェスコも異端者として迫害されてもおかしくはなかった。フランチェスコが説教をすることを教会は良く思っていなかったし、あらゆる所有を拒んで貫きとおす清貧という彼の実践は、過激で挑発的に映ったかもしれない。貧しさは、商人の息子であるフランチェスコにとって逃れられない運命ではなく、イエスとともに歩むために選んだ生き方であった。だからこそ彼の清貧は苦行というよりも、楽しく陽気に実践されるべきものだった。

日刊紙コッリエーレ・デッラ・セーラのジャーナリストで、テレビでも活躍しているアルド・カッツツロ氏は今秋よく売れた著書の中で、聖フランチェスコこそが *il primo italiano* だと言っている。「最初のイタリア人」とも読んでもいいし、「イタリアを象徴する存在」という意味でとらえてもいい。カッツツロ氏が説明しているその理由は、すでに触れたように、①イタリア人が子どもの頃から親しんでいるクリスマスの伝統、プレゼーペの生みの親であることをはじめ、次のような点にある。

②聖フランチェスコはイタリアの守護聖人。

聖人の死から 800 年目にあたる 2026 年から、その命日である 10 月 4 日が祝日になることが決まっている。フランチェスコは現代のイタリア人にもっとも慕われている聖人の一人である。

③聖フランチェスコはイタリア語で最初に詩を書いた人物の一人。

聖人は、聖職者らが使っていたラテン語でもなく、詩のことばであったプロヴァンス語でもなく、民衆がふだん話していたイタリア語で *Cantico delle creature* (『被造物の賛歌』) を詠んだ。正確にいうと当時のウンブリア方言で、現代イタリア語とは異なる部分も多いが、彼の詩はイタリア文学史のごく初期の傑作とされている。

④聖フランチェスコの活動範囲。

聖人は中部イタリアのもっとも美しく神秘的な場所といってもいいアッシージで生まれ育ち、聖書の教えを説くためにイタリア中を歩きまわった。

⑤聖フランチェスコの演劇への貢献。

聖人は言葉によってだけではなく、音楽や歌、演技のようなものも取り入れて聖書の教えを説いた。パフォーマンスに長け、観衆を魅了する力を存分に備えていたのだろう。「神の道化師」とも呼ばれることもある。

⑥聖フランチェスコの影響。

歴史に名を残す人物の中にも、聖人の生きざまに共鳴した者は多い。フランチェスコ会の在俗の信者だったと言われるのはジョットやダンテ、ペトラルカ、ラファエッロ、大航海時代のクリストフコロ・コロンボとアメリゴ・ヴェスプッチ、科学者、発明家の中ではアレッサンドロ・ヴォルタやグリエルモ・マルコーニ、政治家では戦後首相を務めたア

ルチーデ・デ・ガスペリなどだ。確かにそうそうたる顔ぶれである。

⑦聖フランチェスコの思想と実践。

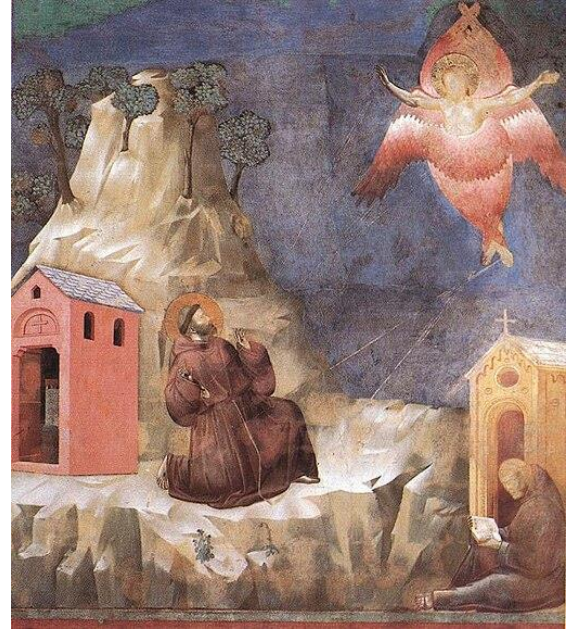
聖人は、男性に劣る不純な存在とされていた女性をみずからのコミュニティに迎え入れ(キアーラの創始した女子修道会)、「体の小さな人間」としてしか見なされていなかった子どもたちを大人の横暴から守った。また、感染の危険をものともせずハンセン病患者を看病し、社会の底辺で生きる人々に寄り添った。Ama il prossimo tuo come te stesso(自分自身を愛するように隣人を愛せよ)は、敬虔なキリスト教徒でなくても、イタリア人の心に刻まれている聖書の教えではないだろうか。それを聖人は言葉で説くだけでなく、イエスがしたように、みずからも実行したのである。

⑧聖フランチェスコはルネサンスの先駆け。

聖人は次の時代の芸術家たちに大きなインスピレーションを与えた。例えばアッシージのサン・フランチェスコ聖堂には、ジョット作とされる、聖人の生涯を描いた一連のフレスコ画がある。そこでは自然を愛し、小鳥に語りかけ、万物を兄弟とみなしたフランチェスコの姿が生き生きと描かれている。また、ダンテもフランチェスコを敬愛し、『神曲』(天国篇第 11 歌)で聖人を称えている。… e del suo grembo l'anima preclara/ mover si volle, tornando al suo regno,/ e al suo corpo non volle altra bara. 「きらめく魂は彼女の懷を離れてみずからの王国へ戻らんとし、己の肉体にそれ以外の棺を望まなかった」。フランチェスコが天に昇るために別れなければならなかった最愛の女というのは清貧のことである。聖人は死後、裸の状態で土に葬られることを望んだらしい。40 代半ばで亡くなった。

アッシージの聖人フランチェスコにちなんでフランシスコと名乗ったローマ教皇が今年の春に亡くなり、新たにレオ 14 世が即位した。このレオ、つまりイタリア語でいうところのレオーネは、聖フランチェスコの心の友であった修道士の名前でもある。ジョットのフレスコ画『聖痕を受けるフランチェスコ』の右側の下方に描かれている修道士のことである。この人物については、聖人が自分を励ますために書いてくれたメッセージを失くさないよう

に僧服の裏に縫いつけて、生涯ずっと大切にもっていたというエピソードが残っている。新しい教皇がレオという名を選んだとき、この素朴で従順な修道士のことを頭に思い浮かべた人は多かっただろう。フランチェスコとレオーネ、二人の友情は、800 年の時を経た今もなお、こんな形で生きつづけているのである。



【ジョット作『聖痕を受けるフランチェスコ』】

出典元: [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Giotto_-_](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Giotto_-_Legend_of_St_Francis_-_19_-_Stigmatization_of_St_Francis.jpg)

[Legend_of_St_Francis_-_19_-_Stigmatization_of_St_Francis.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Giotto_-_Legend_of_St_Francis_-_19_-_Stigmatization_of_St_Francis.jpg)

<参考>

Aldo Cazzullo, *Francesco. Il primo italiano*, Milano, HarperCollins, 2025.

(元当館スタッフ)

* 通訳ガイドの仕事について(1) *

杉 栄子

今年も冬が近づくにつれて、イタリアからの観光客数も落ち着きつつある。イタリア語でガイドやアシスタントをしている人はそろそろ一息つける頃だろう。以前コレンテで通訳ガイドの仕事について書いた時は「駆け出しガイドによるお仕事レポート」といった内容だったが(編注:2022 年 12 月号)、それから数年たち、何となく全体感が見えてきた気がするので、個人的な経験や考えを交えつつ、通訳ガイドの仕事について書いてみることにする。

JNTO(日本政府観光局)の発表によると、訪日イタリア人数は2023年に152,300人であったのが、2024年に229,785人と1.5倍に増えた。今年2025年は9月末までの推定で227,900人に達しているので、年間合計は30万人を突破するかもしれない。そのうち75%強が初訪日で、平均宿泊数は13泊とのこと。どれくらいの人が観光ガイドを利用しているのかまでは分からなかったが、全体の数がすごい勢いで増えているので、イタリア語でのガイドやアシスタントの仕事も同じく増加中である。



【雨の日のガイド】

さて、ガイドの仕事と一口で言っても、色々な形式がある。まずは団体旅行か個人旅行かで大きく分けられる。団体旅行とは通常、旅行会社が企画した航空券、宿泊、観光などがセットになっているパッケージ旅行のことである。申し込みが一定人

数に達すれば催行する募集型の旅行と、修学旅行や社員旅行など最初から大人数で企画する依頼型の旅行がある。長距離の移動は航空機や新幹線を利用するが、例えば京都市内観光や、京都から奈良への日帰り観光などは貸切りバスで移動し、基本的には最初から最後までガイドが旅に同行する。ガイドは訪問箇所の歴史や見どころの説明はもちろん、入場券や乗車券などチケット類の管理や、移動時間を計算しつつ観光の時間配分をするなど、旅行の運営のような仕事も多い。観光客としては全てパッケージされているので非常に楽ではあるが、どこをどれくらいの時間をかけて観光するかは決められていて変更出来ない所以自由度は低い。案内する側としては、訪問する箇所があらかじめわかっているの、しっかりと事前に準備をすることが重要である。

それに対して自由度の高い少人数制のパッケージ旅行も最近はたくさんある。到着・出発時の空港送迎と、東京や京都など主要都市での1日観光にはガイドやアシスタントが付くが、それ以外は観光客のみで移動し観光を楽しんでもらうという形式である。こちらは、例えばホテルから東京駅まで行き、新幹線に乗って京都へ向かい、またホテルまで行くという移動を自分たちだけでやらねばならないので、ある程度は自分で調べて移動できる人向けと言える。パッケージ旅行なので訪問箇所はあらかじめ決められており、ガイドとしては設定されている日の送迎もしくは観光案内のみが仕事ということになるが、他の観光地について質問を受けることもよくある。例えば、京都のあと観光客だけで大阪へ行くが、移動手段はどうすればいいか、何が見どころか、有名な千原一さんのチーズケーキはどこで買えるか等々である。なので自分が担当する日以降の旅程についても頭に入れておく必要がある。

そして次に個人旅行であるが、こちらは旅行代理店を通して手配するものと、完全に全て個人で手配するものがある。希望の日数と行き先で旅程を組めるので最も自由度が高い旅行だ。見知らぬ他人と一緒に行動する必要はなく、家族や友人たちと全ての行程を楽しむことが出来る。ガイドを依頼するかどうかは観光客の希望次第であり、訪問箇所は事前に決めることもあれば、当日に決

めることもある。ガイドとしては事前に決まっている方がありがたいが、観光客の気分で当日に変更になることもあるので、臨機応変に対応できる柔軟さが求められる。

ガイド視点で大きく違うと思うことは、仕事の依頼が旅行代理店から届くのか、観光客本人から直接届くのかという点である。観光客としては、個人手配すれば代理店に手数料を支払わなくていいので、その分節約出来るということなのだろうが、正直なところ私個人としてはあまり引き受けたくない。なぜかというと、旅行のかなり前からやり取りが始まり、観光地や移動手段、ホテルや食事場所についての質問攻めにあうこともあるし、予約を頼まれることもある。それで順調に進んで無事に当日の案内が終わればいいが、そうした雑用を見込んだガイド料金を伝えたと返事が来なくなったり、捨て台詞にパロラッチャ(汚い言葉)を投げかけられたり、直前にキャンセルされるなんてことがあったからだ。もちろん、そのような振る舞いをするのはごく一部の人だけで、ほとんどのイタリア人は誠実で親切である。これ以外に、観光客と直接的な金銭のやり取りをあまりしたくないと思っていることと、案内中に何かイレギュラーな事案が発生した時に一人では対応出来ないかもしれないという不安があるので、個人的には、出来れば旅行代理店経由で仕事をしたいと思っている。

ここまで外国人観光客の主な旅行形式について、①全てガイドが同行し行程が決まっている団体ツアー、②スポットでガイドが案内する自由度の高いパッケージツアー、③代理店が手配する個人ツアー、④全て自分で手配する個人ツアー、と大きく4つに分けてみた。これ以外の旅行形式については、今回は割愛する。

ではイタリア人はどのように手配して訪日しているのだろう。観光庁は訪日外国人の消費動向調査を毎年行っており、その 2024 年次報告書によると、訪日イタリア人のうち、団体ツアーに参加した人は 11%、個人旅行向けのパッケージ(②と③に相当か)を利用した人が 9%、そしてなんと個人手配が 80%である。彼らのうち初訪日の人の割合は、旅行者数全体に対する初訪日の割合 75%強よりも少ないだろうとは思いますが、それでも半分は

超えていると推測する。スマートフォンが普及し AI 翻訳も発達し、様々な情報に誰でも簡単にアクセス出来るようになってきているからかもしれないが、言語も文化も異なる国へ初めて行くのに全て自分で手配とは。私なら不安で出来ないだろう。



【イタリア人にもなぜか人気のりくろーおじさん】

さてイタリア語の通訳ガイドがどのツアーの仕事をするかという、これは人それぞれである。その人の居住地や家族の状況にもよるし、団体旅行が得意だというガイドもいれば、大勢を相手に話すのは苦手な私みたいなガイドもいる。平均的なデータは持ち合わせていないので、ここからは私個人のケースを紹介しようと思う。こんな働き方もあるのだなと参考になれば嬉しい。

コレンテを読んでくださっている方はご存知の通り、私はイタリア語講師の仕事もしているので、①のように長い日数かけて観光客に同行するツアーは担当することが出来ない。なので②あるいは③のツアーを引き受けることがほとんどだ。②のパッケージ旅行の場合は、2~10 名ほどの少人数グループで、たいていは京都や奈良の一日観光である。まれに広島や高野山へ案内することもある。もしくは③の個人ツアーの場合も、全期間ではなく関西圏を 1~3 日間かけて案内することが多い。

この働き方で年間どれくらいの仕事をしている

かという、昨年は 68 日だったが、今年は自己最多の 90 日になる予定である。ガイド 1 年目の 2017 年は 33 日でスタートし、その後新型コロナ流行の影響をもろに受けたが、無事に仕事を再開でき、ありがたいことに以前より多くの依頼を頂けるようになった。仕事を始める前、新人ガイド研修と一緒に受けた他言語のガイドたちと「年間 100 日を目指そう」と励まし合ったのだが、来年あたりに達成出来るだろうか。

実はガイドを始めた時から、稼働日数と案内した人数を記録している。つい先日、通算 1000 人目のお客様を案内した。サンマリノ共和国からいらっしゃったご夫婦で、夫のアドルフォさんは来日経験があり、合気道歴が 50 年以上の日本通。妻のクリスティーナさんは初来日だった。そう、イタリア語はイタリア以外にもサンマリノ共和国とスイスの一部で使用されているので、たまにイタリア人以外の人を案内することがある。彼らは同じイタリア語を話し、文化的にもイタリアに近いので、こちらはずいぶんイタリア人と同じように接してしまいそうになる。私は今年スイスからの観光客に話のネタとして大阪・関西万博のイタリア館について話してしまい、全く盛り上がりなかった。途中で気づいて話題を変えたが、気をつけねばと思った出来事だった。



【1000 人目のお客様】

上述のアドルフォさんは別格レベルで日本文化に精通した方だった。彼ほどではなくても、日本文化に興味を持ち色々調べて訪日する人がいる一方で、イタリアでは日本旅行がブームになっていて、周りの人がみんな行くから来たという人も

おり、興味関心の熱量が人によって全然違う。ガイドとしては区別なく同じように説明をしようと心がけているが、あまり話を聞かないで映える写真を撮ればいいのかという人よりも、こちらのお話を熱心に聞いて質問をしてくれる人だと嬉しくなって、ついついガイドングにも力がこもってしまう。(この項続く)

<参考資料>

観光庁 訪日外国人の消費動向 2024 年 年次報告書

<https://www.mlit.go.jp/kankochou/content/001884192.pdf>

(当館語学講師)

<冬の無料体験レッスン>

1 月から開講の冬期クラスレッスンにあわせて無料体験レッスンを開催します。

ぜひこの機会にご参加お待ちしております。

●イタリア語無料体験(初心者向け)

京都本校: 2026 年 1 月 6 日(火)11:00
2026 年 1 月 10 日(土)11:00

大阪梅田校: 2026 年 1 月 8 日(木)19:00

●イタリア語無料カウンセリング(経験者向け)

京都本校: 2026 年 1 月 10 日(土)14:00~

●スペイン語無料体験(初心者向け)

京都本校: 2026 年 1 月 10 日(土)13:00

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>